

「中国残留孤児・国賠訴訟」判決の日、東京地裁の入り口に、神戸から来た顔見知りの原告たちの姿があった。神戸判決に対する国の控訴に居ても立ってもいられず駆けつけたと、その表情にある。

数日後、神戸の原告の一人・宮島満子さんと会った。71年の苛烈な星霜をくぐり抜けてきた彼女の表情に

井出 孫六



落胆の色はなく、むしろ冷酷な東京判決で心を閉ざしていた門が抜けたかの如く言葉が迸る。9歳の夏に突然始まった凄惨な逃避行が昨日のこのように語られるのを、私はときにミミズのようになりがちな文字でメモをとり続けた。

根こそぎ動員が父と長兄を奪い、幼い弟を背負った母に6人の兄妹が

つき従う。母の背中で弟が冷たくなる。妹があとを追って息絶え、爆弾の破片で兄の一人も亡くなる。

拉古から牡丹江、ハルピンから長春へと鳥のつきまとう葬列に似た逃避行はつづき、暖かいと期待していた瀋陽に着いたとき、罪罪として雪が舞い、道は凍てついていた。闇の中、「水が飲みたいね」と呟

いた母が翌朝、ムシロの下で冷たくなっていった。

現地の人が引き取りに来る日、9歳の少女は裸足で運動場に飛び出し、母の骸の置かれた方向に走った。元気な母が立っているのが見えた。そのとき追いかけてきた兄が強く抱きしめて、「生きるんだ」と叱った……。

(作家)